

# 令和5年度 授業改善重点プラン

令和5年8月30日  
大田区立東糀谷小学校  
校長 菊原 寛之

「型」を教え続け、子供たちに基礎学力を身に付けていく。本校で言う「型」とは、実際に教えて、子供たちが良き変容をし得ると考える「型」である。その「型指導」を継続することによって、基礎学力は身につくという仮説のもとに取り組む。

1. 基礎学力の定着を図るための授業とは・・・「型」による基礎学力を身につける授業を行い続けることである。

◎「型」として、子供たちに「モデル」や「基本形」を示し、「型」を徹底することによって、子供たちに基礎学力が身につくと考える。

2. 「型」による「読み」の力をつける授業

①音読指導の「型」

(1) 教科書に○を10個書く。(2) 段落追い読み(3) 段落各自読み(4) 2)(3)をその教材の終わりまで繰り返す。(○を2個塗る)(5) 二人組一文交代読み(○を1個塗る)

(6) グループ一文交代読み(7) クラス全員一文交代読み+きちんと読めない子の指導(8) 全文各自読み(○を1個塗る)(9) 全文一斉読み(○を1個塗る)(10) 教師と子供の一文交代スピード読み(教師は速く読む。それにつれて子供も速く読む)(11) 二人組一文スピード交代読み(○を1個塗る)(12) 全文各自スピード読み(○を1個塗る)(13) 音読テスト

以上の順に行う。ただこれが「基本的な型」であり、教材によって多少異なってくる。最後に音読テストをして、スラスラ読みの定着を図っていく。

音読指導における5つの手入れ

(1) 趣意説明をする(2) 姿勢を指導する(3) 回数を確保する(4) 個別評定をする(5) 他者意識をもたせる

この5つの手入れをすることで、子供たちの音読は張りのあるものになる。

(1) 趣意説明をする

「何だか分からないけど行動している」という状態ではなく「こういう目的でこれをやっている」と理解して行動することが大切なのである。

音読も、なぜ、張りのある声を出さなければいけないのか「趣意説明」をする必要がある。

趣意説明することで、張りのある声を引き出すことができる。

例えば、以下のように趣意を説明する。

説明. 1声をしっかり出すことで、脳がよく働きます。脳を働かせるから、かしこくなれるのです。

(2) 姿勢を指導する

姿勢が悪いと、声が出なくなる。キチンとした姿勢をすることで、気持ちも締まり声もでるようになる。

国民教育の師匠といわれる森信三氏は、姿勢について以下のように述べている。

「腰骨を立てるということなんだ。性根の入った人間になる極秘伝は、朝起きてから夜寝るまで、常に、腰骨を曲げんということだ」。

森信三著『真実は現実のただ中にあり』(致知出版社) p46より引用

音読には直接関係ないが、姿勢の大切さを示す言葉である。

まずは、教科書を両手で持たせる。次に、一番背が高くなるように座らせる。最後に、両足を地面につけさせる。

この姿勢で、音読をさせることで張りのある声を引き出すことができる。

(3) 回数を確保する

声が出ない理由の一つに、自信がないことがあげられる。

自信をもたせるためには、数多くの練習をさせればよい。

しかし、ただ何度も読ませるだけでは飽きてしまう。変化のある繰り返して読ませることが大切である。

例えば、以下のように行う。

①追い読み(教師の後について読む)②一文交替読み(教師子ども・男女・座席・生まれ月等で交替して読む)③列読み(列ごとに一文ずつ読む)④ペア読み(二人で一文交替読みをする)

(4) 個別評定をする全員(または複数)で読ませていると、声の大きい子に隠れ、声を出さない子が出てくる。これは、当然である。しかし、これではその子の力を伸ばすことはできない。

そこで、一人ひとりの音読を鍛える場を設定すること必要がある。そのために、「個別評定」を行う。(音読テスト)「個別評定」とは、言葉通り「一人ひとりを個別に評定すること」である。

明確な基準を定め「合格・不合格」、または「10点満点」などで評定していく。例えば、「教室のすみずみに聞こえる声か」を基準とし、評定していく。合格できなかった子には、もう一度挑戦させる。

個別評定により一人ひとりの力を発揮させることで、張りのある声を引き出すことができる。

(5) 他者意識をもたせる

音読は、自分のためだけに行うのではない。他者にも聞かせているのである。声が小さい子には、「他者にも聞かせている」という意識をもたせることが必要である。声が小さいと感じたときは、「今、〇〇さんの音読が聞こえた人?」と聞く。挙手によって、自分の声がどこまで聞こえているか確認させる。再び、読ませる。

また、挙手でどこまで聞こえているか確認させる。

このようにすることで、自分の声がどこまで聞こえているのかがわかる。

そして、全員に聞こえるにはどのくらいの声で読めばよいのかがわかる。

このようにして、他者を意識させることで、張りのある声を引き出すことができる。

【理科の授業改善】

1 日付と教科書のページ数をノートに書かせる。2 教科書の「実験問題=疑問文の形になっているもの」を読み、そのまま、ノートに書き写す。実験問題とは、例「窒素にものを燃やすはたらきはあるのだろうか?」などのことである。3 実験問題は赤枠で囲む。4 「目的」をノートに書く。教科書では「〇〇を調べよう」などと書かれているものである。このとき「〇〇を調べる」と言い切りの形にさせる。5 「方法」をノートに書かせる。教科書に書かれた実験の方法・手順をそのままノートに写す。箇条書きになっているときはきちんと番号も書かせる。6 必要な用具をノートに書かせる 7 この「5と6」をまとめて「実験図で書かせる」。このとき、実験に使う用具には必ず全部名前を書かせる。ピーカー、ろうとなどと、記入させる。もちろん実験手順も書き写させる。

★実験★8 実験中に「わかったこと、気付いたこと、思ったこと」を箇条書きで書かせる。9 実験の結果を書かせる。※結果とは「窒素の入った集気びんに火のついたろうそくを入れたら、一瞬で火が消えた」などのことである。10 結論を書かせる。結論とは「実験問題に対する端的な答え」である。たとえば、上記の実験問題に対する結論は「窒素にものを燃やすはたらきはない」である。※「実験問題にズバリと短く答えなさい。通常は一文です」という指示で書かせる。

【使い方応用編その1】教科書に書き込みをさせる。教科書は「教科書に書き込みをすることで理解を助ける」ように作られているページを活用する。例えば、五年の「てこのはたらき」などで、実験結果を表に書き込ませるページに、教科書に直接書き込ませる。

【使い方応用編その2】写真を使う。例えば5年単元に「流れる水の働き」川を観察に行かなければならないが、現実にはなかなか行けない。このとき、教科書の写真を資料として授業する。社会科の写真の読み取りと同じ。そのような視点で理科の教科書を見て、四年の季節の移り変わりとか、月と星とかの単元ではとてもいい写真が掲載されているので活用する。

【使い方応用編その3】まとめ問題を授業する

教科書の単元の終わりには、必ず「まとめ」という形で問題が書かれている。ここをきちんと授業する。単元の終わりに、重要事項を「問題」という形で授業すると定着を促す効果がある。例えば、次のような方法が考えられる。

1 教師が問題を読み、子どもは答えだけノートに書く。 2 教科書会社の指導書のテスト問題をコピーして、必要な部分を切り貼りして「ミニテスト」を作る。

3 「ミニ論文=学習作文」を書かせる。(例)酸素にはものを燃やす働きがあるのだろうか?というテーマを与えて書かせる。